


今 月 の 一 冊

元木更津市教育委員会教育長 西村 堯 選

タコの知性 ー その感覚と思考 ー

池田 譲 著 ・ 朝日新書

ISBN978-4-02-295066-6

810 円 + 税

書店でこの本を見つけた時、私は、「えっ!？」と思った。何かグニャグニャ
していて、およそ「知性」とかけ離れているような「タコの知性」を究明しよ
うとするこの本に俄然興味を持った。皆さんも、「どんな本だろう!？」と思い
ませんか。

早速ページをめくると、実に面白い。「タコ」学に魅了されてしまった。著
者は、次のように述べる。

本書のタイトルを「タコの知性」と銘打った。タコを知的な動物と印象
づけたのは、彼らの学習能力の高さゆえである。

(p.66)

第二章「タコの賢さ」の中から学習能力の高さの例を一つ紹介しよう。

学習訓練を受けたタコ(デモンストレーター・実演者)が、水槽の中で、白玉
と赤玉とを見て、赤玉を攻撃する(このように訓練されている)。それを透明な

仕切りのある水槽の片方で、何の訓練も受けていないタコ(オブザーバー・観察者)に見させる。

さて、注目すべきはオブザーバーだ。隣のタコが赤い色の球を攻撃する様子を「なんだ、なんだ」という様子で熱心に見始める。頭部を動かして熱心に見る。

(p.75)

その後、デモンストレーターを水槽から出し、仕切りを外し、水槽にオブザーバーだけ残す。そして、オブザーバーに赤玉と白玉を同時に見せる。

なんとオブザーバーは赤玉を攻撃する。オブザーバーのタコは、餌と電気ショックを使って赤玉を攻撃するように人間に訓練されていない。ただ、隣にいるデモンストレーターのタコが赤玉と白玉が出た時に赤玉を攻撃する様子を見ていただけだ。

(p.75)

これを「観察学習」、「見まね学習」というのだそうだ。「観察学習」はヒトでは普通に見られる。しかし、実は他の動物では、なかなか難しいらしい。例えば

ヒトに系統的に近いとされるチンパンジーでも観察学習は難しい。相当に高度な学習なのだ。

(p.77)

マダコがそれをやってのけたのだ。

著者は、「外界環境への強い好奇心」が、タコが元来持っている特性ではないだろうか、とまとめている。

私は、この実験事例を読んで、思わずうなってしまった。

この「観察学習」の事件を、さらにイイダコでも緻密に検討してみせた研究があるとのことである。二人の日本人研究者によるイイダコの知性研究というのは、あまりそれまでなかったことらしい。「小さなイイダコも知的なのである」と著者は誇らしげに述べる。

第三章「タコの感覚世界」では、タコの眼と吸盤についての研究成果を述べる。私が驚いたのは、タコの脳は、体重に比して大きい、という話だ。タコの脳サイズは、高等脊椎動物(鳥類、哺乳類)と下等脊椎動物(両生類、爬虫類、魚類)の間くらいらしい。

「腕で考える動物」という見出しも面白い。吸盤が優れた触覚器官として働いている。

タコの腕は非常に高感度のセンサーということができる。

(p.118)

第四章「タコの社会性」についての研究も興味深い。これまで、タコは群れをつくらず一尾で生活していると思われてきた。しかし、最近になり、社会性があるのではないかという見方が出てきた。「隣人を覚えているタコ」の項で、

生活場所が接している同種他個体、つまりは巣や縄張りが隣接している個体同士は、互いのことをちゃんと認識しているというものだ。

(p.168)

顔見知りの隣人には不干渉という。「ディア・エネミー」(親愛なる敵さん)という訳である。同種他個体を認識する能力を持っているのだそうだ。

しかし、まあ、研究者という人たちは、手を変え、品を変え、粘り強く観察し、一つのこと追求するものだなあ、と感嘆してしまう。

どのページを読んでも、知的刺激に満ちた楽しい本である。こんなすばらしい本が、わずか 800 円余りで読めるのだから、なんて幸せなことだろう。